

● 東欧・スラブ

専門化した学問を統合する

家田 修（いえだ・おさむ）

北海道大学スラブ研究センター・教授



地域研究者の軌跡

① 生年・出身地……一九五三年、愛知県

② 専門分野・地域……東欧地域研究、とくにハンガリー人地域

③ 学歴……東京大学経済学部（経済史専攻）、東京大学大学院経済学研究科（理論経済学・経済史専攻）

④ 職歴……大学助手（三二歳、四年半）

⑤ 現地滞在経験……ハンガリー（二四歳、二年半、留学生…三四歳、二年、研究員…三九歳、一年、地方都市の県庁付き研究員…四五歳、一年、研究員）、ロシア（四四歳、半年、研修）

⑥ 研究方法……フィールド調査なしに論文はありえない。文献資料や文書資料もフィールドのなかで見つけ出したものが大きな意味を持つ。調査対象の中に入り込んで、

一緒に考え、働き、苦楽を共にすることから始める。

⑦ 所属学会……スラブ東欧学会、東欧史研究会、現地の社会史学会、社会学会

⑧ 研究上の画期……東欧を選んだという意味では一九六〇年代の学生運動、社会主義圏への関心という意味では中国の文化大革命、地域研究という意味では一九八〇年代末の現地における個人農のフィールド調査

⑨ 推薦図書……バイブルのような地域研究書をあげるのは困難なので、問題提起の書としてこの数年間で新しい地域史を開拓した左近幸村編著『近代東北アジアの誕生』（北海道大学出版会、二〇〇九年）をあげておこう。

メッセージ

(地域) 研究者になること

地域研究者を意識し始めたのは、二年近くの農家実態調査(家族ぐるみで一緒に働いた)を行った経験、および文書館で大部の文書全体を読み通した経験が基になっている。現在の研究は地域環境問題、とりわけ昨年のハンガリーでの「赤泥事故」、および福島原発事故以後は環境汚染事故への社会的対応を研究テーマにしている。教育でも環境をテーマに講義と演習を開講している。

第I部「現場の悩み三〇問」を読んで

地域研究を「情報」で考えてみる。地域研究はディシプリンの応用といわれるが、ディシプリン分析に必要な情報を提供するのも地域研究である。情報の要素を5W1Hとすると、抽象化を目指すディシプリンでは、5W1Hすべてをまとめて分析することはない。極端な場合「だれが何をした」だけで完結する。他方、地域研究ではいずれの要素が欠けても分析は成立しない。ディシプリン分析でも「だれが」と「何を」以外の3W1Hを考慮すれば地域研究になる。ジャーナリズムとは5W1Hを重んじる点で共通する。しかし地域研究が扱う情報は「ニュースⅡ非日常の出来事」ではなく、日常に關するものである。日常にこそ問題点が潜んでいる。ニュースを日常性から説明できる能力が地域研究者に問われている。

地域研究の魅力と可能性

一九〇二世紀は専門知が求められた。人々は知的関心を絞りこみ、集中的・効率的に仕事をした。しかし高品質の製品が生み出される傍らで、廃棄物が環境を汚染した。「フクシマ」はその究極である。京大原子炉実験所の小出裕章さんや今中哲二さんたちは、「原発が安全なら、なぜ都会に作らないのか」という自然な問いかけを発し続けた。私の恩師が最近、某学会から退会した。「次回大会を予定していた福島大学を、あろうことか放射能汚染と余震の恐れを理由に忌避し」たことに憤慨し、「福島市民の心の傷に塩をすり込むような、信じられないこの唾棄すべき決定に抗議し」、「このような決定を下した『精神のない専門人』(ヴェーバー)たちの学問にもはや信頼を寄せることはできない」からだと伝えてきた。奇しくも、小出さんが国会で国会議員に投げかけたガンジーの言葉、「理念なき政治、労働なき富、良心なき快楽、人格なき学識、道徳なき商業、人間性なき科学、献身なき信仰」にも同じ主張がある。

二一世紀は専門化した学問を統合する時代である。5W1Hの情報をばらばらに切り離すことなく、総合的に論じる時代である。人類が対立から共生へと精神を転換させている今、地域で人々と共に考えることから学問を始める地域研究にこそ大きな未来がある。